義太夫

義太夫協会会報
第89号
平成21年7月15日
社団法人　義太夫協会発行
〒104-0045 東京都中央区築地
1-12-16 松竹会館別館3F
TEL・FAX（3541）5471
http://www.gidayu.or.jp

歴史的音盤のアーカイブ

波多一索

このところ、レコード店で廃業するところが多く、先日欲しいレコードがあり、二三のお店を尋ねましたが一軒のお店は既に閉店していて入手出来ませんでした。新しいヒット曲はパソコンなどで入手し、レコードをコピーして互いに貸し借りで済ますことの多い現状では当然の成り行きかもしれません。

私など「義太夫教室」で、明治・大正期の名人上手といわれた方々の演奏をＳＰレコードで耳にすると、書物などでどんなに想像しても分からなかった浄瑠璃の面白さが、なるほどと瞬時に分かることがあります。そうした経験者にとってはレコードの最近の現状は心配でなりません。

日本にレコードが誕生したのは１９０３年、その時の最初のレコードがＥＭＩレコードから先年復刻再発売されました。中には常磐津林中の「将門」などがあり、大変話題になったのでご存じの方もおられると思います。評論家の渡辺保氏がこのレコードについて「明治の名優・五代目尾上菊五郎、九代目市川団十郎、初代市川左団次いわゆる「団菊左」と称された三人の名人が、この時期に一挙になくなられたわけで、レコードの出現がもう二三年早くこれらの名優たちの声が記録されていたら、今日の歌舞伎のためにどんなにか役に立っただろう」と書かれています。義太夫の竹本摂津大掾や豊沢団平についても言えることでＳＰレコードは、生きた芸能の資料として誠に重要なことが、お分かり頂けると思います。

幸いに昨年来、こうした貴重な歴史の生きた証言といえる音源を、このまま放置しておいて良いのだろうかという声が強くなり、国立国会図書館が文化庁などと組み、20世紀前半に製造されたＳＰレコードの音源約７万曲を２０１２年までにデジタル化保存することになりました。実際の仕事はＮＨＫやレコード協会など６団体で設立した「歴史的音盤アーカイブ推進協議会」がするわけですが、内容としては日本初の流行歌とされる松井須磨子の「カチューシャの唄」（１９１４）や東条英機首相の「大東亜共同宣言」など音楽以外にも演説や講演も含まれ資料としても貴重なものになりそうです。

これによって初期レコードの原盤の散逸劣化が防がれ、後世において教育などの場で活用されることになれば、その効用ははかりしれないと思われます。一日も早い完成を期待しております。

―朝重師匠ありがとうございました―

昨年11月3日に竹本朝重師が逝去されました。協会では2月7日両国回向院にて百箇日法要を、5月26日国立演芸場にて偲ぶ会を開催いたしました。師とゆかりのある方々に追悼文を寄せて頂きました。

朝重さんとの想いで　鶴澤友路

平成五年十月突然朝重さんから「お弟子さんに是非して下さい」との電話あり「一度お目にかかってから」と十二月始め東京より来淡その日からお稽古、実に礼儀正しく人情味あふれた方で芸の上でもひし〳〵と伝わって参りました。相三味線として国立劇場始め各地公演その前後一週間から十日余りと、各月毎に三、四日来淡してのお稽古。嫌だった飛行機にも馴れ十四年間弟子として友としてすぐれた人格者として変ることなくお付合いたしました。芸の想い出多々あれど長くなりますので真似して真似の出来得ない想い出を記してみましょう。三六五日中おめもじしている日以外一日としてかかすことなく午後十時には必ずお電話が入り「お師匠様御機嫌如何ですか」それから御自分の一日の出来事、微に入り細に入り報告、それから浄瑠璃の稽古、最低三十分熱が入れば一時間二時間、刻を忘れ電話機が重くなること度々、付人が東京―淡路の通話料、月何万と心配する有様。入院中御自分駄目なら妹さんから御機嫌伺い、二十年十一月一日「永い間有難うございました。今日一番しんどいネ」これが最後のお電話。二日後に遠い〳〵旅立となりました。浄瑠璃院敏誉語匠朝重大姉　どうか安らかにと御冥福をお祈りいたしております。　合掌

朝重さんを偲んで　竹本駒之助

朝重さんには、私が十八歳のとき本牧亭の階段の下のところで初めてお目にかかりました。朝重さんは三つ上ですので、当時は二十一歳でいらしたと思います。以来、五十五年ほどのお付き合いをさせていただきました。その時からずっと、本当にお美しいお方でした。一生涯お変わりなく義太夫を愛しつづけ、とても御意志の強いお方だったと思います。どんな問題が起きても決して動じないお方で、頼りにしておりました。特にご挨拶などいつも御立派にして下さり、到底私の及ぶところではございません。昨年、帯屋を一段お語りになるとおっしゃった時、身を案じて私が前をつとめさせて頂きましたが、結局その舞台が最後になってしまいました。その時の「南無阿弥陀仏」は今でも耳に残っております。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

新作との出会い　竹本弥乃太夫

朝重さんとの繋がりは深い。戦後、映写技師だった彼女のお父さんとは、日比谷のバーでよく飲み義太夫談義に花を咲かせた。彼女は文才も有り、お父さんの意に反し、義太夫道に進んだ。私と彼女との出会は新作の浄瑠璃で、いろいろな作品に取組んだ。太棹戯曲座の「おみつ」、音楽詩「しのだの夢」管弦符「水鳥抄」、創作舞踊「鶴翔」等々、中でも私として特に印象に残っているのが、上野文化会館でカンタータをやった時の事である。此れは北満の地に残された日本人の、ソ連兵に凌辱され、大多数の人たちが生きて還れない悲惨の物語で、分厚い五線符を、私が全部朱に書き直し、私の三味線で彼女が語る。他の音楽との打合せ作業は、彼女との想像に絶する過酷さであった。お陰で引揚者の方々の絶大な歓迎と感謝を得られた。顧みると、貪欲にも一つの物に根性と意欲を持ち続けた彼女であった。皆さんにも愛された彼女の死は余りにも早かった。今はただ安かれとご冥福を祈る次第です。

ひとすじのひと　川鍋淑子

恐れていたことが十五年の暮から始りました。八年からずっと肝炎治療中でしたが、一

門の世話や相談に係わっていた出浦さんと私が病院に呼ばれ、癌が見つかり治療の為、二十五回目のおさらい会が出来ないと詫びられました。その後母のように慕う出浦さんには一晩泣きましたと電話で云われたそうです。

病院で私はあえて冷静を装い、治療法があるのですから恐れることはありませんと申しましたので云えなかったのでしょう。治療がすみ稽古場で二人だけの時、いつもの笑みもなく内視鏡のこの治療法は余命三年程とのことだそうですとおっしゃいましたが、私は一言の言葉も出ず、朝重師と二人只黙ったままになりました。長い間一筋の道を歩んでこられたお強い方に、軽い慰めなど、今度は云えませんでした。それからは、生きているかぎり舞台へという姿勢を、協力を得ながら、ぶれることなく貫かれ、旅立たれました。

朝重師匠の思い出　竹本朝輝

この度、朝重師追悼特集発刊で、師匠の思い出をとのおはなしをいただき、協会の御供養にも出席出来ず、どこまでも気のきかぬ弟子であった私の様な者にありがとうございます。

師匠はとても口が重く、余り私にはおしゃべりにならないお方でした。私の未熟から失敗しましてもお怒りにならず、大きな声でおしかりになった事もございませんでした。己を責めて人を責むる事なかれ…という徳川家康公のお言葉通りの方でした。又、私の前では余りお笑いになる事も少のうございました。只お弟子さんに入り、違うお師匠様から「朝重さんのお弟子さんてあなたですか、あの人は並の頭の良さじゃありませんからね」と言われました。人と人とのおつき合いもとても大事になさっておられた様にお見うけ致します。そして私みたいな者に神経を使われ何一ツ人の事はおっしゃらず、愚痴もきいた事ございません。もちろんふざけた事もありません。

只「朝輝ちゃん着ぶくれちゃ人には出来ません。着ぶくれている着物一枚ぬげば人に出来るのです」とおっしゃったお言葉、耳に残ってはなれません。私は行儀知らぬ田舎者、師匠はすごくお行儀のいい方でした。弟子の身で申し上げるのもはばかられますが、人間として完璧で、すきがなく、くずれない、人間が出来すぎたお方でした。私と朝重師匠の似ている所があって、お酒が呑めない事、並外れた方向音痴です。それと師匠のお弟子さん達の〝七宝の会〟がございまして、その方達もとても師匠思いで又、師匠も会員様を宝物の様にしていらっしゃいました。その方達の悲しみも一汐の事と存じます。師匠も御無念でございましたでしょう。私には「もったいない師匠」の一言につきます。

又、五月の追悼公演では私のわがままをお許し下さり、駒之助御師匠様、協会の皆様にもお世話になり心より厚く御礼申し上げます。御妹様より賜りましたお形見の袴をつけさせていただいた事も感無量でございました。

思い出　本牧亭の女流義太夫　その(三)

池田弘一

八、なんとなく思い出される人

なんとなくでは申し訳ないが、そうした人のことがふと思われ、懐かしむ年令に私もなったのか。

竹本広松　いくたびか転居して、東北の方へ帰って行った。どんな芸だったか覚えていない。実のところ、印象に残る芸の持ち主ではなかったようだ。浅い所に出ていたが本牧亭へ行くといつも笑顔を見せていた。

七月八日より廿四日まで（夏時半期場）

竹の園　八日　大坂　貴子　小松　駒之助　貴子　駒之助　久竜　竜之助
恋の十三　八日　大坂　貴子　小松　駒之助　貴子　駒之助　久竜　竜之助
新の口十　八日　大坂　貴子　小松　駒之助　貴子　駒之助　久竜　竜之助
舟唄　八日　大坂　貴子　小松　駒之助　貴子　駒之助　久竜　竜之助
山名屋姫　八日　大坂　貴子　小松　駒之助　貴子　駒之助　久竜　竜之助
廿四孝　八日　大坂　貴子　小松　駒之助　貴子　駒之助　久竜　竜之助
御所石松達　廿四日　大坂　貴子　小松　駒之助　貴子　駒之助　久竜　竜之助
白紙姿柳　廿四日　大坂　貴子　小松　駒之助　貴子　駒之助　久竜　竜之助
日本丸由代屋　廿四日　大坂　貴子　小松　駒之助　貴子　駒之助　久竜　竜之助
梅花宿屋　廿四日　大坂　貴子　小松　駒之助　貴子　駒之助　久竜　竜之助
新の口　八日　竜之助　駒之助　久竜
恋坂　八日　竜之助　駒之助　久竜
太十　八日　竜之助　駒之助　久竜
上野　本牧亭　電話下谷(83)六〇三七

竹本駒竜　昔の番組で見ると、四日間、太夫・三味線の組合わせ、出番順に変わりはなく、毎晩語り物だけが変わっている。四日間通うと二十段の異なる浄瑠璃が五組の人々によって聞けたのだ。土佐子の名がある。いつのことだったろうか。重之助・三生の前が、駒竜・駒登久。「新の口・廿四孝・安達・宿屋」とある。私が思い出すのは「明烏」の部屋、女髪結のお辰が浦里に意見するくだり。ちょいと下世話な感じが出て、節が回わって面白かった。一昔、二昔前の女義太夫である。今は聞こうにも聞けない語りである。

竹澤団生　若い三味線方であった。すなおな芸だったと記憶する。行儀もよかった。土佐廣が素八に相三味線にしたらとすすめたそうだ。私もいいなと思っていたが結婚してやめてしまった。

九、講釈師・噺家の義太夫

駒竜の出ている番組の左側に第二回花形三人会とある。「新の口（素竜）・壷坂（駒竜）・太十（越道）」である。

素竜にはよい後援者がついていたそうだ。素竜の出ている会にはよく客が入った。後援者が切符をまいたからである。講談・落語の会にも助演者として招かれた。私が好きだった神田松鯉（二代目）の毎月十八日の会にも出るようになった。松鯉会には貞吉・円生・円歌など助演者の顔が揃っていた。その中に素竜が加わったのである。いつの間にか松鯉会は、素竜との二人会の様相を見せてきた。

そうしたなかで素竜を師匠とする義太夫の稽古が始った。松鯉・志ん生・文楽らである。ここに松鯉の床本がある。中を見ると朱の入っているのは八重垣姫のクドキだけ。松鯉・志ん生らの稽古は短期間で終わった。その理由の一つは素竜が没したことにあるようだ。しかし、文楽は愛宕下に住む素八のもとに通った。供にはのちの五代目小さんが付いていたという。後に素八が会をした時、文楽は「心眼」で助演している。やがて文楽は土佐廣のもとへ通うようになる。「壷坂」をたいそう熱心に稽古したという。その出来ばえのほどは、土佐廣や文楽の甥なる人にくわしく聞いたが、ここでは敢えて割愛する。

それにしても、もとの講釈師・噺家たちはよく音曲の稽古していた。だから音声が定まっていたのだと思う。芸になる声が出ていたのである。近時急激にふえてきた女性の講談師・落語家は音曲、なかんずく義太夫の稽古をすべきだと思う。きゃん〳〵声を日本の話芸にふさわしい声にするために。

十、はっとした思い出

何かの肩書のついた会の中入りに協会の大きい看板の人が、幕のおりた舞台を背に、客席の下手に立った。その挨拶の中で「義太夫には忠義と孝行がありますから」と胸を張って言い放った。私は瞬間はっとした。今でも忘れられない。確かに忠義・孝行はすばらしい徳目である。

しかし、義太夫に出てくる忠義・孝行の多くは、孔子の説いた忠からも孝からも遠くはなれている、別物である。

「寺子屋」の理不尽が認められるのは、それがすぐれた芸によって、この世に生きる人間の心をゆさぶった時だけである。筋ではないのである。

せんだってロックの忌野なる人がなくなった。私には無縁の世界の人だったが、その人の死をいたむ人々の姿・声を見、聞きして驚いた。「あの人は私たちを幸せにしてくれた」と泣いているのである。それは葬儀の、別れの時だけではないのである。

私を幸せにしてくれた本牧亭。そしてその本牧亭での女流義太夫。理不尽をこえたすぐれた芸によって聞く者をとりこにした演奏者の人々。

今日の演奏者の方々よ、会場はどこであれ、聞く人を幸せにすることつとめてほしい。

思い出話から脱線してこの稿を終わる。

正会員 TOPICS

紀尾井人形浄瑠璃

去る二月二十四日二十五日に、「第二回紀尾井人形浄瑠璃～女流義太夫の新たな世界～」が紀尾井小ホールにて催されました。

昨年同様売り出しとほぼ同時に完売という人気ぶりで、出演者でもチケットが取れないほどでした。

演目・配役は、『加賀見山旧錦絵』より草履打の段―竹本越孝・鶴澤寛也　長局の段―竹本駒之助・鶴澤津賀寿　奥庭の段―竹本越若・竹本越京・竹本越春・鶴澤駒治ほか。文楽人形特別出演は、昨年に引き続き国宝・吉田文雀師をはじめ吉田和生さん、また今回新たに吉田玉女さんも加わって下さりとても豪華な舞台となりました。

女流義太夫研究家・水野悠子先生のお話や吉田和生さんによる文楽人形の解説によって、舞台とお客さまとの距離がぐっと縮まったような気がします。

もともと義太夫節は男性が演奏するために作られたものですが、今回の演目のように女性が活躍するものですと特に、女性が演奏することによって今まで隠れていた新たな魅力が発見されたのではと思います。

さて今回もメディアにいろいろ取上げていただき、たいへんな反響がありました。

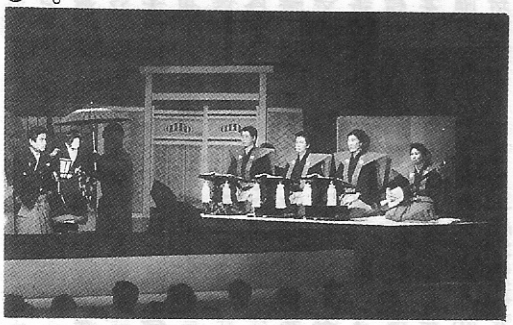
NHKのニュースでは、本公演のハイライトである駒之助・津賀寿の「長局」の舞台がかなり長い時間放映されるという、めったにないうれしいことがありました。また越孝が首都圏ネットワークで特集され、ひみつの年齢が世間の皆様に知られてしまうというハプニング？もありました。

昨年の第一回が契機となり、いま女義に光が当たりつつあります。演者のさらなる精進は当然のことですが、お客様方のますますのご声援を心よりお願い申し上げる次第です。

またこうした興行的にはなかなか難しい公演を、女流義太夫の発展のためにと採算度外視で企画してくださっている紀尾井ホール（新日鐵文化財団）の皆様、心よく出演してくださる文楽の皆様にも、篤く御礼申し上げます。

次回の計画もあるそうなので（詳細未定）、今年チケットを入手できなかった方も、どうぞ来年をお楽しみにお待ちください。

（鶴澤寛也）



写真提供：新日鐵文化財団
写真撮影：福田知弘

今後の予定

8月22日（土）　一日体験教室　於TKビル
8月23日（日）　女流義太夫ミニコンサートⅢ　於ほり川
9月2日（水）　車人形公演　於府中ふるさとホール
9月28日（月）　第二回竹本土佐恵の会　於内幸町ホール
12月14日（月）　竹本越孝の会　於内幸町ホール
平成22年
3月3日（水）　第七回鶴澤三寿々　素浄瑠璃の会　於お江戸日本橋亭

会報第88号に掲載いたしました女流義太夫演奏会のスケジュールのうち、平成22年2月23日は3月9日に変更になりました。ご注意下さい。

〈寄付〉

○水野悠子様　一万円
○蘇武則之様　三万円
○大日本素義会様　三万円

〈寄贈〉

○日本俳優協会様
四行稽古本　大谷勘兵衛版
第一・二・四・五集

祝　第九十回素義会！

去る五月二十三日（土）、鳥越神社にて素義会が開催されました。

番組は、初参加六名による太棹メドレーで始まり、全三十二番。出演者は総勢四十四名（助演者を除く）と、九十回にふさわしい盛大な会となりました。

会長の菅野昌行さんも、「久し振りに大所帯で感激しています。若い人が増え、これで百回に向けて、はずみがつきました。」と大喜びです。

年々この会も、出演者の年令やお稽古歴もはば広くなり、今回は、フランスからの参加者もあり、インターナショナルな、個性あふれる会となってきました。

今回初参加の方に感想を伺うと、いろいろな出演者の方がいらっしゃって刺激になった、会の雰囲気が手作り感あふれて楽しかった、と皆さんすっかり馴んで、とても楽しまれたようです。

長い歴史がありながら、初めてでも楽しく参加出来る懐の深さが、この素義会の魅力かもしれません。

百回開催に向けて、更なる会のご発展をお祈りしています。

＊

〈番外〉

ビゼーさんのスペシャルインタビュー

素義会で「組討」に挑戦なさったビゼーさんに、お話を伺いました。

＊フランソワ・ビゼー

日本滞在五年、義太夫稽古歴二年半。フランスを出てトルコに八年滞在、その後日本に来て、大学で仏語・仏文学を教え、現在に至る。

○素義会に出演した感想は？

―不安で一杯でした。ブン廻しは初めての経験で、とても面白かった。他の会場より親近感があって、「私の居場所！」という気がします。

○そもそもお稽古を始めたきっかけは？

―友だちに連れていかれた越孝先生の会で初めて義太夫を聴きました。すぐに魅了され「追っかけ」をする内に、自分でもやってみたいと思うようになりました。

○お稽古は楽しいですか？

―最初は教え方が不思議でした。一対一で向かいあって、先生の真似をする教え方は、ヨーロッパではあり得ません。必死に真似ている内に、自分の身を任せているのが、気もちよくなりました。

○日本語は難しいでしょう。どうやって覚えるのですか？

―とても難しく、毎日「読む」勉強をしていますが、漢字を覚えるのは大変時間が必要です。義太夫は、一字一字でなく、場面〳〵を理解して語る様にしています。

○ビゼーさんにとって義太夫の魅力とは？

―ヨーロッパの声楽は、透明さや滑らかさを追求するのに対し、義太夫はざらざらした感じで面白い。（ヨーロッパと）発声法・音階・表現方法が全く違うので非常に難しいです。今、義太夫の「リズム」を覚えるのに苦労しています。

義太夫に、はまった感？のある、ビゼーさん。そんなビゼーさんを、フランスのお友達は、とても誇りに思っていらっしゃるそうです。

お友達の声援を得て、益々ご精進下さい!!

インタビュー通訳
スペシャルサンクス
安藤俊次様

中央がビゼーさん

女流義太夫と共に47年

松井一男

協会から、永年聴きに来ているのだから、なにか書いてみるように、とのお話が度々あり、意を決して書くことにいたしました。

私は上野の生まれで、歩いて5分の所に本牧亭があり義太夫もやっているのは知っていたのですが、年寄りの芸の分かる人の行くところで、若い者が行ってはおかしいだろうと思ってなかなか行く気になれずにいました。20代の時から歌舞伎座の3階や一幕見に行っているうちに文楽に行ってみたくなり、三越劇場へ行き始めました。その頃私が毎晩行くお湯屋さん（銭湯）には本牧亭の番組表が張ってあり、あるとき豊竹若大夫会と書いてあるのを見て、若大夫さんなら文楽で聴いている、行ってみようと思い初めて本牧亭へ行ったのは、昭和37年でした。[注1]若大夫会は月に一晩だったように思いますが、文楽が文楽協会になる前まで続きましたが、普通若子大夫さんが30分位語り、そのあと若大夫さんと重造さんで、何かを丸ごと一段語るのでしたが、土佐廣さんが参加するときもあり重造さんでなく猿之助さんのときもありました。志度寺、和田合戦、九段目などは力強い語りに感動したのですが、十種香は全く分からず、今聴けば少しは分かるかと思うのですが、その時は何の感動もありませんでした。若大夫さんは語り終るとすぐ手を引かれて客席に出てきて、「疲れておりますので少し」と言って、「次のときは何を語りましょうか」と言ったり質問に答えたりしていました。若大夫さんは陽気で茶目っ気もあった人のようですが、私はまじめな面しか知らず、作が悪いといわれているものについては「ご存じのように無理な作でございますが、作者としましてはこれを義太夫語りがどう語り生かすかということでございまして」と言ったり、客が「満員とはいえ多くない人数の本牧亭でこれだけ語ってくれるのは有難い」と言うと「本牧亭であろうと三越劇場であろうと語る以上は命がけでございます。明日ありと思うなと申します」と答えていたのを覚えています。[注2]女流義太夫は若大夫会に行き始めてすぐ行くようになり、それから父母が死亡した時の前後などを除いてずっと聴かせてもらっています。私は昭和7年生まれなので30歳になっていましたが、初めて本牧亭に行ったときには下足のおじさん中村さんに「今晩、義太夫です」と言われました。若いのに義太夫でもいいのかい、という意味なのですが、じきに顔を覚えられ他の芸能に行くと「今度の義太夫の番組をあげましょう」と言って緑色の番組をくれるようになりました。それでその頃は行ってみなければ出演者も演目も一般の客には分からなかったのですが、私はいつも行く前から知っていることができました。中村さんとは行く銭湯が違っていましたが、どちらかが休みの日は一緒になることがありました。広小路の本牧亭がなくなったとき退職しましたが文字通り裸の付き合いが27年続きました。

「本牧亭の灯は消えず」（駸々堂出版1991年）[注3]は、昭和37年から本牧亭で働き始めたとしているので、その年に私が行き始めた訳です。その頃は2月から12月までの月初めの4日間だったので節分の日は出演者の人が舞台から豆撒きをしてくれました。私は若いときは時間の余裕がなく4日のうち1日か2日しか行かれませんでしたが、4日来るので疲れますと言っているお年寄りもいました。若い客は少なく100人のうち3人位だったので私も目立ってしまい、行き始めて少したったとき客席に入って行くと、元どこかの席亭さんといわれていたお年寄りが「あの若い人はよく来るねえ、義太夫は聴くにも修業がいるんだ」と言うのが聞こえたことがありました。私は分からないのに来てもしようがないというのではなく、よく来るのはいいことだ、そのうち少しは分るようになるという意味だと思っていたのですが、その人がそばにいる人と話していたのを聞いていて、土佐廣さんはサワリんとこへくるといい声がでるねえと言ったり、咳のとこ（酒屋）ばかりは、つばめさん（越路大夫さん）より重之助さんがいいと言っていたのを覚えています。

客席はとても賑やかで、しばらく前に越道さんが舞台で対談で昔の話と言って話された時「大きな袋を背負ってくる人[注4]がいて、幕が揚がると大きな声で『越道さん、越道さん』て何度も言うんですよ」と話していられましたが、私もその人は仕事上大きな袋をしょって歩く必要があり帰りに本牧亭に寄るのかなと思っていたのですが、その人は声を掛けたり手を叩いたりで、からだ中で喜んで聴いていて、チャリのときは下掛りのことを大きな声で言うのですが何を言っても卑しい感じにはならず私も楽しいと思っていました。終演になるとさっと顔付きが変り静かに帰って行くのでした。そういう賑やかでも品の悪くない人達がいて、また静かに聴いている温厚で芸の分りそうな人達もいたのですが、その他に下品で騒々しい人が大分いて半数位だったように思いますが、「遣い果して二分残る」のところでは誰がどう語っても一斉に騒々しく手を叩き「金ゆえ大事の忠兵衛さん」は聞こうとしないのでした。きれいな声で語ると、「歌謡曲じゃないぞ」と言ったり、ほめるのに「品格があって結構だ」と言ったりするのもいやな感じでした。その頃のお医者の岡田道一先生の文章に酒を飲んできているのか下品で騒々しい客がいて困るということを書いた後で、「日置さん（綾太夫さん）よろしくつまみ出せ、大きな袋を背負ってくるおじさんの掛声ぐらいは許されるが」というのがあったと記憶しています。雑誌「ほんもく8月号」（本牧亭昭和40年）には、「いま本牧亭で一番声の盛んなのは（中略）。女義太夫でしょうか（中略）。その声援が大げさすぎてイヤな客、に感じられたりするようです。わざとらしいのや、がくや落ちの感じの声だの、演者で高座で思わず失笑したり、そのフンイキが楽しいと言えないこともありませんが、やはり『ほどほど』でないと困ります。出演者も困るでしょう」という新内の岡本文弥師[注5]の文章があります。演奏中の私語も多く終演になると後から下りてきて前の人のからだの間から下足札を差し出し早く出ようとするマナーの悪さなどいやなものでした。

その後の客席は段々静かになると共に、聴く人が少なくなってしまったのは残念ですが、今は客席の気分はとてもよくなり、演奏中の私語も皆無に近く「金ゆえ大事の忠兵衛さん」を聞こうとしない人は一人もいなくなりよかったと思うのですが、演奏の方は、今は一日の演奏時間が昔より短かくなり、演目も少ないときが多く、昔はいつも4つは聴けたので昔の方がずっとよかったと思いますし、また演奏前の会場で、陽気にふざける感じの解説のようなお話が時々あり、私は脳が悲劇を聴きとりにくくなってしまうのですが、それぞれ事情があって仕方のないことなのかなと思いますし、運営の成り立たない入場料などご苦労のある中での熱心な演奏活動にはいつも感謝しています。

私は永く聴いているのに趣味でお稽古をしたことが全くないせいもあり、とても理解が遅いようで聴き始めた頃は、演者により楽しめる人もいたのですが、全く分からない人もいて、土佐廣さん、小津賀さん、素八さん、越道さんなどは、聴いているだけで全く感動がなく、土佐廣さんはむしろ聴きたくないという感じでした。それからしばらく聴いているうちにいいなと思う演目があり、その後はそれぞれの人が他の演目を語っても少し分かるようになりました。聴き始めてどのくらいたった時のことかは忘れていますが、それぞれの人が何を語ったとき初めて少し分かったと思えたかはよく覚えているもので、土佐廣さんでは質店、小津賀さんでは中将姫、素八さんでは岸姫でした。越道さんでは鮓屋でした。それからまたしばらくたって越道さんの喜寿のお祝の会での桜丸切腹はとてもいい芸と思えたのですが、聴き始めてから26年たっていました。色々な芸能芸術について、いい芸術というものは初めて接しても少しは分かるものだ、むずかしいばかりで全く分からなければ、それは本当にいい芸能芸術ではないのだといういい方がされることがよくありますが、私にはあてはまりませんでした。義太夫は私にはとても難しくとてもいい芸だとしか思えず演者には遠くにいてもらって、気長に少しずつ近付くしかないと思えるのです。これからも聴き続けて50％ぐらい聴きとれるようになったらいいなと思うのですが、段々心身共に衰えを感じるようになり無理かもしれません。しかし義太夫は舞台から聴かせようとしているもののうち10％聴きとれれば、色々な浅薄で奥行のない芸に接するよりずっ

といいと思います。そして10回位行って10％位聴きとれるようになったように思います。また芸能芸術に接するには最初は一番いいものを見たり聴いたりしなければいけない。最初に最高ではないものに接し、それをいいと思ってしまうと後から最高のものに接してもその価値が分からなくなってしまうからといういい方もありますが、私にはそうとは思えず、そうだとすれば私は土佐廣さんの語りはちっとも分からず、この声と猿幸さんのきれいな音とで、これで合っているというのかなどと思っていたのですから義太夫には縁なき者として離れるよりなかった訳ですが、美しい舞台の姿や、美声にひかれて離れないでいたために土佐廣さんの芸も少しは分かるようになりました。

芸能には洒落た芸、粋な芸といわれるものが色々あり、それぞれ結構な芸で楽しみにはなるのですが、それは世の中のどうにもならない悩み苦しみから逃げられる人は、きれいに逃げていればいい、それが粋だ。野暮はいけない粋に生きればいいといっているように思えるのですが、義太夫の芸の多くは、逃げようとしても逃げられない、そこにそのままいるほかはない、それでいい。といってくれているようで、私は義太夫の方が自分のだらしのない人生を慰め力づけてもらえるのです。

普段全く文章を書くことのない私ゆえ、長々とくだらないことを書いてしまいました。

女流義太夫と松井さんのこと

竹本綾太夫

私は、昭和35年3月に改組された、梅・桐・竹・藤・松の五組競演による「女流義太夫連盟より仰せつかった。昭和45年6月の協会法人化の時、協会公演部に移管される迄の十年間、共和会も私も苦闘を続けました。でも常にお客様の応援があったから続いたし、それが現在につながっていると思います。

当時のお客様・出演者の殆んどがいらっしゃらない折、昭和37年頃より、毎日のようにお見えになり、かゝさず47年間、今もお見え下さっている方がいらっしゃる。そのお方こそ、松井一男さんであります。

普段着にツッカケで見えられ、下足の勝っちゃんとは顔見知りのようなので、御近所の方かなと思いましたが、なにしろ無口な方なので、言葉を交わしたのは5年位経ってからでした。瓢々と来場され、木戸銭を払い、静かに入場されるというスタイルは、今でも変わりません。私の計算では、女義公演日数は昭和37年中程から今日迄、ざっと一千日強となります。その他の女義を加えると、気の遠くなるような御来場数になります。

前々から、なにか会報にお原稿を、とお願いするたびに「女義のいろはから始めて大分経つが、まだ良く分かっていないので、とても〳〵」と御辞退されていたが、このたび、頂いたのは嬉しいことでした。「拙ない原稿なので、うんとカットして直して下さい。そして題名もそちらでつけて下さい」とのことでしたが、一読してびっくり、旧本牧亭の雰囲気、お客さんと演者のこと、松井さんの謙虚なお人柄や、お気持がよく分かる素晴しいお原稿です。ゆえに一字一句も削るところなく、載せて頂きました。（注記は私の一存）

注1　「若大夫会」は、定連筆頭の高野俊雄様が、若大夫師の後援者でもあったので、企画された会である。マネージャーは私が勤めたが、37年3月から、38年2月の一年間、毎月24日に開かれたが、時代物の大物ばかりという凄い会であった。

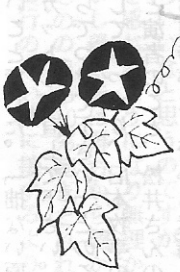
注2　「若大夫会」は37年3月24日が第一回なので、松井さんが女流義太夫にお見えになったのは、37年4月か、5月の公演からと思われる。

注3　「下足の中村さん」が、本牧亭に勤め始めたのは昭和37年である。昭和36年末に、何年か勤めた、喜恵ちゃんという、威勢のいゝ娘さんが、結婚でやめたからだ。

注4　「大きな袋」の人は、通称竹屋さんといって、リヤカーに竿竹を積んで「竿や竿竹」と売る人で、従って声は大きく、袋は前掛・手甲・脚絆を風呂敷に包み、それを背負って客席に坐っていた。

注5　「岡本文弥さん」は、宮染・宮之助さんとよく見えた。講談の松鯉・馬琴・貞丈・南鶴の方々、落語の文楽さんは定連といってよかった。

協会の動き

'09年1月より
'09年7月まで

1月1日　会報第88号発行
1月5日　仕事始め
1月8日　義太夫教室第61期稽古始め　於ＴＫビル
1月10日　ぎだゆう座初春公演　於お江戸両国亭
1月22日　女流義太夫演奏会　於国立演芸場
1月23日　普及部会　於協会事務所
1月28日　義太夫体験講習　於東久留米総合高校
1月30日　第六回素浄瑠璃の会　於お江戸日本橋亭
2月1・2日「ぎだゆう座」公演　二日間　於上野広小路亭
2月7日　故竹本朝重百箇日法要　於両国回向院
2月11、18、25日、3月4日　伝統芸能体験　野崎村を語ってみよう　於花伝舎、国立演芸場
2月14日　人形と浄瑠璃で紡ぐ愛の物語　壷坂観音霊験記　於ニッパーズギンザ
2月24、25日　紀尾井人形浄瑠璃　女流義太夫の新たな世界　於紀尾井小ホール
3月1日　都民芸術フェスティバル　第39回　邦楽演奏会　於国立小劇場
3月1・2日　第六十回「じょぎ」公演二日間　於上野広小路亭
3月4日　女流義太夫演奏会　伝承者研修発表会　於国立演芸場
3月7日　義太夫教室ＯＢ演奏会　於スペースＦＳ汐留
3月12日　第2回　日本音楽大集合　於国立文楽劇場
3月17日　常務理事会　於協会事務所
3月19日　芸団協総会　於花伝舎
3月19日　理事会　於国立演芸場
3月19日　女流義太夫演奏会　仮名手本忠臣蔵　お軽の人生を追って　於国立演芸場
3月26日　義太夫教室第61期閉講　於ＴＫビル
3月27日　総会　於本郷稽古場
4月1日　編集会議　於協会事務所
4月1・2日「ぎだゆう座」公演　二日間　於上野広小路亭
4月19日　第六回はなやぐらの会　於紀尾井小ホール
4月22日　坂本昌子正会員資格審査　於国立演芸場楽屋
4月22日　女流義太夫演奏会　於国立演芸場
4月25日　一日体験教室　於ＴＫビル
5月1・2日　第六十一回「じょぎ」公演　二日間　於上野広小路亭
5月23日　第90回大日本素義会　於鳥越神社白鳥会館
5月25日　義太夫教室第62期開講　於ＴＫビル
5月26日　邦楽会議総会　於花伝舎
5月26日　公演部会　於国立劇場中稽古場
5月26日　女流義太夫演奏会　於国立演芸場
5月29日　事務局長会議　於花伝舎
6月1・2日「ぎだゆう座」公演　二日間　於上野広小路亭
6月7日　第八回素浄瑠璃の会　於竹隆庵岡埜
6月10日　編集会議　於協会事務所
6月19日　第七回たつみ会　於上野広小路亭
6月20日　第十一回古典芸能鑑賞会　第六回あすなろ会　於日本橋劇場
6月22日　芸団協総会　於オペラシティ会議室
6月23日　女流義太夫演奏会　於国立演芸場
6月24日　総会　於築地社会教育会館
7月1・2日　第六十二回「じょぎ」公演　二日間　於上野広小路亭
7月10日　橋本治と共に　女流義太夫を楽しむ会　於奏楽堂